

コロナ厳戒の中、手術

ベトナムで「患者待たせてしまう」

名古屋千種区に本部を置くNPO法人「日本口唇口蓋裂協会」は二月二十二日―三月一日、ベトナム南部のベンチエ省に医師や看護師ら医療援助ボランティアを派遣した。現地からの支援要請を受けて、二十八年続く事業。新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大で同国でも厳戒態勢が敷かれる中、援助団に同行した。(斎藤雄介)

日本口唇口蓋裂協会 同行ルポ



「このような状況でも来てくださり感謝します」。二十四日朝、支援先の「グエンティンチュー病院」の前院長ホアン・ベトナム(ハム)が一行を迎えた。援助団は愛知学院大や東京大などの医師ら二十八人。例年の半分ほどの規模だ。

新型コロナウイルスの広がりを受け、協会は派遣の中止も検討した。感染者との接触が分かれば、医療現場に立てなくなること想定される。所属の病院運営に支障が出るなどの理由で、二十人以上がキャンセルした。

午後診察。気温二〇度を超える中、机と椅子を並べた病棟の廊下が患者や家族でごった返した。訪れたのは七十五人。「手術をやり直した方がいいですね」。初診を受けた教授(ハム)が、女兒(ハム)を診て言った。

二十八年前と違い、今はベトナムでも口唇口蓋裂の手術は受けられる。ただ、技術の問題で顔にゆがみが残り、日本の医師に再手術を求める人も多い。一昨年末の前回訪問時に発熱などで手術できず、待っている患者もいる。同大の新美照幸准教授(ハム)は「中止になればさらに待たせてしまう」と決行の理由を語った。



ベトナム・ベンチエ省で口唇口蓋裂の患者に手術を施す医師たち
手術室の入り口に置かれた消毒剤とマスク着用を促すメッセージ。いずれも斎藤雄介撮影

口唇口蓋裂 染色体の異常などで顔の形成が十分に行われず、上唇や上あごに生まれつき亀裂がある先天性疾患。日本では5000人に1人程度の割合で起こるとされ、乳児期に治療するのが一般的だが、ベトナムでは経済的な事情から大人になっても放置している例もある。現地ではベトナム戦争時に米軍が散布した枯れ薬剤の影響と信じられているが、科学的には証明されていない。

現地の報道では、同国内で感染が確認された十六人は既に回復し、新たな感染はない。省側の要請もあり、援助団は宿泊先と病院以外の外出自粛を決めた。当初の懸念に反し、日本人が「感染源」として警戒される現実を突きつけられた。

異様な空気の中で迎えた手術。しかし、医師たちは着々と手を進めた。亀裂の入った唇を、その後の成長も考慮して縫い合わせていく。例年より少ないが、十九件を成功させた。

手術を終えた患者は回復室へ。そこに、日本語とベトナム語の対訳が書かれた紙があった。「水はのめましたか」「痛みはありますか」。紙を指さし、患者の状態を確認する。ただ、北海道大の看護師菅野香さん(ハム)が明かす。「字が読めないお母さん多い。一度も手を振っていた。」

最終日。回復室のベッドで、術後の二ちゃん(ハム)を母親(ハム)が抱きかかえていた。「コロナウイルスのニュースは知ってるけど、心配してないよ」。上あごの亀裂の影響か、娘の言葉の発達が遅いことを心配して連れてきたという。

母親の靴下は所々ほつれ、穴が開いていた。それを気にもせず、ほほ笑んでまな娘をなでる。寄りかかった二ちゃんには、違和感の残る口元を少し緩め、立ち去る医師らに何度か手を振っていた。